

地域子育て支援拠点研修事業〈東京開催〉

中堅支援者向け研修

<開催概要>

- 開催日 平成23年1月29日(土) 10:00~16:30
- 会場 東京ウィメンズプラザ
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・東京都・子育て応援とうきょう会議
- 協力 NPO法人せたがや子育てネット
- 参加者数 190名(行政38名 NPO/任意団体118名 その他団体/企業13名 その他21名)

<開催挨拶>

10:00~10:10

- 主催者挨拶 財団法人こども未来財団 理事長 藤田興彦さん



- 開会挨拶 NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん



○プログラム1 基調報告 10:10~10:35

『地域子育て支援拠点事業の概要と展望』

講師 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 黒田秀郎さん

中堅支援者向けということで、レジメ前半の地域子育て支援事業の概要と位置づけ、実施状況などの基本データや概要を踏まえつつも今後の施策などの説明にも時間を割いていただきました。まずは、子ども・子育てビジョンなどの国の施策の変遷を説明いただき、その後、子ども・子育て新システムの最新情報について具体的な説明をしていただきました。基本方針は、子育てを社会全体でささえること、利用者本位であること、地域主権を前提にすべての子育て家庭に必要なものを提供していくこと、政府の推進体制を一元化することの4つです。新システム実現に向けて政府の推進体制と合わせて財源を束ねて行くことや社会全体で費用負担をし、地域主権のために、基礎自治体を重視していること。また、幼保一体化などにより、多様な保育サービスを提供、ワーク・ライフ・バランスの実現を目指すことなどを図解で説明されました。最新の施策の説明とあって中堅者の皆さんは、熱心にメモを取られてた様子が印象的でした。

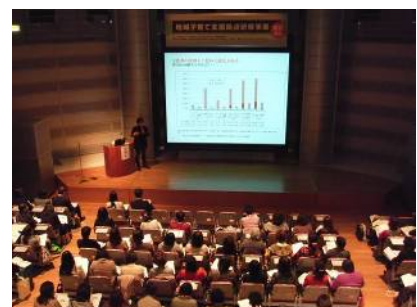


○プログラム2 基調講演 10:35~11:45

『地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」について』

講師 日本福祉大学教授 渡辺顕一郎さん

渡辺先生ご自身が主任研究者として調査をされた「地域子育て支援拠点事業における活動の指標<ガイドライン>」が平成21年度に完成し、これまでの調査の背景やガイドラインの活用方法についても中堅者ならではの詳しい説明をしていただきました。「ガイドライン」は地域子育て支援拠点事業が多様になっていく中で、利用者主体の視点に立って、支援の質の標準化を目指し、実践の核となり活用されていくために設けられたとのことでした。中堅支援者になると、難しい事例に対応することも増え、個人の判断では抱えきれない事例も多くある中で、支援者はこれからの時代それぞれの地域で、何を求められているのか、何が必要なのかを把握し、地域をつなぐ役割を担っていかなければならないと述べられました。



○プログラム3 分科会 13:00~16:30

◆ 第1分科会『心の問題を抱える親への対応』

講師 : 明治学院大学 教授 杉山恵理子さん

コーディネーター : 社会福祉法人雲柱社 施設長 新澤拓治さん

コメンテーター : 港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長 原美紀さん

まず、最初にコーディネーターの新澤さんからは、心の問題を抱える親や発達の問題を抱える子どもが、地域の中で支援されるために、近隣でネットワークを組んで親子の見守りをするなど、連携に一定の協力は得られたとしても、広くひろば利用者や近隣住民に理解を得ることが難しいケースもあり、心の問題を抱える家族が地域の中で暮らすことの大変さをお話いただきました。

次に、DVD 映像を見た後、杉山先生は、「地域とつながれない世界で生きていることの孤立無援さ、心に病を抱えている人の助けとなるのは、専門職の支援ではなく、地域の中で普通に暮らし、沢山の人のつながって生きがいを持って、役割を得ることではないか。自分が安心して暮らせる場だったら、子どもも安心して育っていくことができる。地域子育て支援拠点事業の一番大事なことはそこではないか」といったコメントをされました。

また、「心に病を抱えている人たちは、世の中のつらい事や大変なことを引き受けてしまっている人たち。ひろばを安心して過ごしてもらえる場所にするために必要な事は、一番大変な思いをしている人を一番大事にすること。根気強く、見捨てないで、関わっていく姿勢を示すことが、ひろばへの信頼や安心感につながっていく。」と話されました。

●グループワーク

自由な雰囲気の中、意見交換を行いました。心の病を抱える親を支える難しさや戸惑い、おそれ、他の利用者との関係のつくり方、個人情報の扱い、トラブルが起きてしまったときにどう対応できるかなど、熱心に話し合い、杉山先生からアドバイスいただきました。

・目の前の親子とどんな関係がつかれるか、恐れずに関わっていくこと。

・まずは、暮らしを安定させること。そうすれば育児不安が減り、症状も安定。育児もうまくいくという好循環が生まれる。眠れていないならば、30分でも横になったら？と声をかけたり、具体的な支援と工夫を。

・苦手意識がある場合は、それは自分だけなのか、スタッフ共通なのか、それはなぜなのかなど、少し意識してみるといい。自分は苦手でも他の人なら上手に対応できることもある。自分の内側の課題なのかもしれない。ひとりで背負わずチームで支援すること。

・支援というのは、ライフサイクル上必要な体験をしてその人なりに成長していくことを助けること、持っていた力がうまく発揮できないのを取り戻すのを助けること。

・救ってあげたい！と気負わずに寄り添って、一緒に工夫してみる。その人に必要な苦勞を取り除くことはしてはいけない。

・どんな状況でも子どもにとっては、お母さんは大切な存在。親の存在を大切にし、親子の関係への支援を。子どもが望んでいるのはいい支援者ではなく、いい母親である。



●グループワーク まとめ

・新澤さんより

「自分のひろばの中での立場や役割、地域の中でのひろばの位置づけなどによって状況は異なるが、スーパーバイズなど含めて支援していく形をつくる必要があります。」

・コメンテーター 原さんより

「スタッフがパートナーとして希望を持ち続けて関わるためには、ある種のタフさや、チームで分かち合っていてやっていくこと、現場スタッフのサポート、専門家との連携などが必要だと思います。また、スタッフ自身が自分を理解することも必要であり、振り返りを大事にしています。地域でやれること、地域でしかできないことをどう担保していくか。このような研修の場や、現場を離れて皆で話し合ったり先生の話の聞いて整理したりすることが大事だと思います。」



◆ 第2分科会『聞く・話す・自分を知る』

講師 愛知淑徳大学 教授 佐々木政人さん

コーディネーター NPO法人せたがや子育てネット 代表理事 松田妙子さん

佐々木先生のやわらかい語りかけからなごやかに分科会がスタートすると、緊張気味の参加者の皆さんも少しずつ、肩の力がぬけていく雰囲気が見て取れました。

佐々木先生のセッションを受けることそのものが、普段の私たちの態度やたたずまいを振り返るための体験でもあります。



①マイクロカウンセリングから3つの基本技法について学ぶ

3 人一組になって、話す人、聴く人、そして観察者と、それぞれ役割を変えていきながら、ロールプレイをしました。

1. アテンディング・ビヘイビア
2. 話し合いのオープンな誘い方
3. 感情の反射(気づき)



②人生絵本の作成

分科会後半は、グループの中で誰のストーリーを基に絵本をつくるかを決め、その方の話を丁寧に聴いていきます。話を聞く場が「グループ」になっても、3つの技法は忘れないように接していくのが難しいと感じました。一対一のときに比べて、役割が薄まったような気がしてしまうのですが、「話を聴いてもらっている」と相手に感じてもらうことは、より深く、その人が話をしていくために重要です。グループのメンバーがより共感し、寄り添っているグループほど、話が深まり、話し手からエピソードが飛び出してくる感じが感じられました。一人1シーンをつくっていく過程では、グループの中でストーリーがつながるよう、共同作業が必要になってきます。3つの技法の大切さは、随所で“効いて”きます。

③発表

それぞれのグループが作成した人生絵本を発表し、分科会が終わりました。分科会全体を通して確認したのは、「秘密保持」ということです。ここで話されたことは、どうか、外にはださないでください。ここは話しても安全な場ですよ。ということを伝えることで、話し手はより自由に語ることができます。佐々木先生からの投げかけを体感することで、拠点での私たちの役割、態度などをもう一度確認することができました。



④学びの始まり

分科会を振り返り、自分の気持ちの場所や温度、声のトーンや姿勢など、自分の中の変化について感じてみることに、セッションの中で、先生がどうやって自分やグループに働きかけたかを振り返ることが大事だと思います。学びは、ここから始まります。



◆ 第3分科会『行政と拠点で取り組む予防型支援』

コーディネーター NPO法人びーのびーの理事長 奥山千鶴子さん

事例報告 NPO法人子育てネットワーク・ピッコロ

代表理事 小俣みどりさん

NPO法人さくらんぼ 理事長 伊藤保子さん

コメンテーター 文京区男女協働子育て支援課 課長 久住智治さん

①事例報告

小俣さんからは、清瀬市の特徴やそれに合わせた総合的な子育て支援や訪問事業の概要、教育委員会の協力を得て実施している、ジュニアサポーター養成講座などについてご紹介いただきました。活動の中で見えてきた課題として、育児不安が強い家庭などいわゆるグレーゾーンの家庭やひろばにくることさえ高いハードルを感じている家庭に対し、どうアプローチしていくか。家庭を訪問することによって、育児の悩みなどを聞いてその家庭の状況を把握し、行政などに繋げることが虐待予防にもつながるのではないか。そのためには行政や地域との連携が必要だという報告がありました。



伊藤さんからは、横浜市の地域の特徴や待機児童が多いことや、保育園機能では対応できないニーズが多いことから出発した多機能型支援について、実際のケース事例を用いながらご紹介をいただきました。子育て環境の変化により、孤立化が進んでいることや複合的な問題を抱えていることなどから、法人内の各種サービスを組み合わせて支援をする必要がある。しかし、法人の機能だけでは足りないこともあることから、他のNPO等との関係をつくり、連携し効果を発揮するためには、子育て分野にも地域コーディネーターが必要だという報告がありました。



②質疑応答・ワーク

多様な事業展開をする場合にスタッフ間の連携や思いの共有はどうしているのかという質問があり、事業連絡会を月1回開催していることや、その中で自分の考えを引き出すようにしている等との答えがありました。グループワークでは、事例報告を聞いて、キーワードと今後実施してみたいことなどを話し合い、発表してもらいました。キーワードは、行政との連携のあり方の他、スタッフ間との連携や地域のニーズを訪問支援などで見極めるようなことが挙げられました。また、これからやってみようことには、家庭訪問型支援のほか、子育て支援団体のネットワークづくり、行政へ粘り強く伝えていくことなどが挙げられました。



③行政の立場から

久住さんからは3つの視点からお話いただきました。

- ・子育て支援とはさざなみが押し寄せる絶え間ない支援
→地域と連携することにより虐待予防にもつながる
- ・研修は大事
→自分たちの取組みを振り返ることができる
- ・行政＝公
→自分たちも行政と同じ公の立場であるよう、同じビジョンをもちながら取り組んでほしい。



④まとめ

- ・ひろばに来ることが高いハードルと感じている親子がいることや、地域のニーズを把握し、行政や地域と連携しながら支援をしていくことが必要。
- ・スタッフ間で思いを共有する。自分たちの活動が親と子供のためにだけでなく、自分自身が生き活きするためであることもあえて意識する。
- ・小さなことでも実績を積み重ねて、行政と民間ができることをお互いにすり合わせながら、行政に認められていくことで協働の可能性も広がる。

